

無責任エッセー

旅のハジの書き捨て

福崎かずたろう

うるせえ！うるせー！うっせ！！

しかし私の怒髪天的感情をよそに、婆さん達はしゃべり続ける。まるで自分達の会話が途切れたときがお迎え時だと思っているかのように……。

山陽本線三原行き電車の車内は、年寄り率80%、ジジババ比1:3。バアさん達は元気いっぱいである。耳を半開きぐらいにして（全開では鼓膜が保たない）、話の内容を確認しようと努めた結果、それぞれが自分勝手に話をしていて、受け手が居ないという事に気づいた。

婆さんAの話の途中で、婆さんBが「そうじゃ、そうじゃ、して、あの時の話じゃが……」というように話を別の方向へ持って行き、その途中で婆さんCが話の腰を折り、またまたその途中で婆さんAが途切れた自分の話を再開しようと割り込みを掛ける、といった風にまったくもって方向性というものが無い。女三人寄れば……とはよく言ったもので、3人どころか車内に何十人と婆さんがいるわけだから、致し方無いか。

福山まで40分の我慢大会であった。禁煙車以外に禁騒車というのが欲しい！と切実に思った。

福山からは、北に延びる、福塩線に乗り換える。

ごとごとと電車に乗って22分、万能倉（まなぐら）駅で降りてみた。

細い県道の脇に商店が集まり、すぐ消える、どこにでもある田舎町である。目を引いたのは、以前は日通の荷物取扱所であったであろう土茶色のモルタルの建物が、カラオケ道場（スナックの事か？）になっていたこと。時代は移り変わるのだ。

この町は、井伏鱒二の生家に近い、という記憶があったのだが、それらしい看板はない。記憶違いだったか？

所在なく、町を見下ろす小高い丘を目指した。畑の中の道を歩いた。4月らしい、体を包み込むような暖かい空気の中に、戯れるような風が吹いていた。空には鳥が鳴き、地には菜の花が揺れ、土の臭いがし、猫がころがっていた。ああ、私は春の中にいるのだ！わはは！と思った。別にそれだけの事だが、何か嬉しかったのだ。

丘の上は神社になっていた。よくあるパターンである。うっすらと汗が出てき

たので、薄手のセーターを脱いで、長袖のシャツの袖をめくった。歩くことが楽しい季節であるなあ。

再び福塩線の人となる。ほどなく、府中に着き、ディーゼルカーに乗り換える。いよいよ中国山地に分け入るのだ。

矢多田川に沿うせまい谷地形に忠実に、ディーゼルカーは高度を上げて行く。谷蔭で車内は暗いが、ときおり車窓が光のカタマリに覆われる。線路脇の桜の群落が、反射光を差し込むからだ。

車内はお年寄りで占められている。いたって静かである。数では先ほどの山陽本線のジジババに負けぬくらい居るが、両者の違いは地域性の問題なのか。

都会の年寄りは、喧噪の中で自己の主張を貫かないといけなかった、とか。あるいは、地方の年寄りは、偏狭な村社会で沈黙することが保身の最善策だと悟ったのだ、とか。

う〜ん、どうなんでしょうかね。

峠を越えた、上下・甲奴（こうぬ）の2つの駅を過ぎると、車内は閑散としてきた。私はやおら立ち上がり、荷棚のカバンから天下の宝刀、『福山の小鯛寿司弁当』750円を取り出し、またもや食物の異化作用に努めるのである。まずくはなかったが、駅弁は酸っぱくてイカン。

中国山地のなだらかな盆地の風景を見つつ、弁当を食い、窓から時折入る春のやさしい風とディーゼルの煤煙を浴びつつ、三次に着いた。三次は以前一度だけ訪れたことがある。三方向から流れてくる河川が合流する事から、三次という名があるとか。山地の盆地で河川が多いので、霧がよく発生するらしい。

しかし今回は駅の外にも出ず、すぐさま広島行き芸備線のディーゼルカーに乗り換える。乗換時間1分である。実にいそがしい。

なにしに旅行してんだろ。やっぱり海苔漬しだったのかな。

論旨のハッキリしないまま

第四回 おわり